

令和3年度みやこユニバーサルデザイン審議会
みやこユニバーサルデザイン普及推進部会 会議録

日時 令和3年10月8日(金) 午後2時～4時20分

場所 京都市本庁舎 4階 正庁の間

出席委員 井川委員, 上田委員, 神岡委員, 木戸委員, 阪根委員, 高岡委員, 八田委員,
本條委員, 保田委員

欠席委員 古川(泰)委員

1 みやこユニバーサルデザインの普及推進について(意見交換)

井川 京都市みやこユニバーサルデザイン審議会は2005年(平成17年)に
部会長 作られた。この時期にこのような組織ができたというのは日本では草分けだ
と思われる。それから10数年経っている。今, SDGs も言われているが,
ユニバーサル社会, 共生社会の実現に向け, 政府から様々な通達が各自治体
に発信され, 全国的にユニバーサルデザインの認識が高まってきたと感じて
いる。

そういった状況の中で, 京都では早くにユニバーサルデザインに取り組み
始めたが, 街の中を見てみると, もっとこうした方が良いのではないかとい
うこともあったりして, この審議会が中心となって有効的な意見を出し合い,
それが生かされ, 形になるように進めていかなければならないという思いを
持っており, ユニバーサルデザイン普及推進部会を今年度から作ったという
経過がある。この機会に御意見をいただき, 改善できるところがあれば皆で
改善していくという場にしていきたい。

まず, 皆さんの自己紹介, 所属団体や日頃のユニバーサルデザインに関す
る活動などを簡単にお願ひしたい。

上田 京都手をつなぐ育成会は知的・発達障害のある本人たちの会である。役員
委員 はほとんど親が担っている。日頃は啓発活動, 本人たちの親睦活動, 11行
政区の支部ごとの活動を行っている。今最も育成会京都本部として力を入れ
てるのはキャラバン隊という活動である。昨日も南区の小学校に行ってきた
が, 啓発活動の一環として, 皆さんに知的・発達障害がどういうものかを知
っていただくものである。車いすの方や目の不自由な方, 耳の聞こえない方
にはどう援助すればよいというものがあるが, 知的・発達障害については具
体的な方策がないので, ゲームやコントを交え, 「こういうことをします」と
か「こういう理由でこういうことをする」ということを伝えている。数年前
から育成会の総会やバザーで披露していたが, 市教育委員会の役員から, ぜ
ひ子どもたちにも知ってもらいたいと言ってもらい, 去年から小学校に行っ
て披露している。子どもだけでなく大人を対象にしたカリキュラムも可能で
ある。ぜひ知っていただきたい。

神岡 京都YWCAは御所の西にあり, ボランティア活動で10年前から参加し
委員 ている。YWCAに外国籍の人たちのための多文化委員会, 親・子育て支援
のための委員会がある。夏休みや冬休みのイベントや滋賀県の農家に行って
稲刈り, 夏のキャンプでは地元の子と交流したりしている。また, 親から虐
待を受けたりした女子を受け入れる施設を運営し, 世話, 相談, 就職先探し,
家探しなどを行っている。高齢者の入居施設もある。建築家ウィリアム・メ
レル・ヴォーリズが建てた洋館を借り, 1階を食堂として運営し, 誰でも入
っていただけ, いろんな方の居場所になっている。昨年から幼稚園の運営を始

め、多文化の子ども、障害のある子どもも受け入れ、現在50人余りの子どもが利用している。

木戸
委員

市内には129の児童館と10の学童クラブがあり、運営母体は様々だが、児童館学童連盟で一つになって子育て支援、健全育成の活動を行っている。

子育て支援や子どもたちの放課後支援をしているが、障害のある子どもや外国籍の子どもも利用している。虐待の早期発見に努めており、特別な支援が必要になる前にサポートしたり、一緒に考えたりしている。また、最近は小学生でも不登校の子も多い。学校に行けない理由は様々だが、行けないことに対する子ども自身の自信のなさや保護者のしんどさなどを受け止めている。学校には行けないが児童館なら行ける子もいるし、学校に行けないことによって生活リズムが乱れるので、児童館があることで何か援助ができないかと活動している。児童館だけでは子どもたちのサポートはできないので、専門機関と連携取りながら日々の業務を行っている。

高岡
委員

京都新聞社会福祉事業団の活動に昭和58年から携わっている。ここにおられる様々な団体とも交流、協力してもらい、今日まできている。

当事業団は京都と滋賀で、地域福祉の向上を目的に、寄付金を基に運営している。大規模災害時に災害時救援金を受け付け、被災者に届ける活動や、障害のある人、高齢者、子どもなどの福祉施設の設備援助もしている。以前から給付型の奨学金を設けており、例年150～170名の方に奨学金を給付してきたが、近年はコロナ禍で収入が途絶えお困りの方が多くおられるため、倍の数の大学生、高校生に奨学金を給付している。また、利用者と密接にならざるを得ない福祉施設現場への助成を行っている。

新聞社系の団体なので、新聞紙面を使った啓発も大事にしており、ユニバーサルデザインの普及啓発にも取り組まないといけないと考えており、今回のユニバーサルデザイン賞の応募も呼び掛けさせていただいた。先ほど部会長とも広報をもっとやっていかなければという話もしていたところだが、広報の手段としては、毎週月曜に福祉の特集面がある。福祉現場で頑張る人や、様々な提言や催しなどを紹介している。委員の皆さんの団体でも周知したいことなどあれば、お声がけいただければと思う。副部会長という立場をいただいているが、一委員として皆さんと一緒に議論していきたい。

保田
委員

精神科病院で長く勤め、退職後は精神科救急や精神保健福祉関係の団体の手伝いをしてきた。自分の人生のほとんどをボランティアなことでやっていきたいと思っていたところ、家族会からお誘いいただき、3年前から活動に携わっている。京都府下には25の家族会がある。地域ごとに独自の発達をしてきており、私はまだ半分も分かっていない。そのうえ、コロナ禍になり、皆が集まり対面で交流する機会も減少し、地域の家族会に出向いて行くということもできない状況になってしまった。委員の皆様にも名刺代わりに季刊誌をお渡ししたが、季刊誌を企画したり、家族会の活動を学んでいる最中である。

ユニバーサルデザインについては、福祉関係の仕事をしていたので、少し聞いたことがある程度でよく分かっていない。バリアフリーや障害のある人への合理的配慮を考えたときに、精神障害というのは形にならない心の部分で、どうやったら形に表せるのかが難しいというのは、35年間精神障害に関わる仕事をしていて感じるし、それをどのように伝えていけばよいのかと思っていた。

一日こころの健康増進センターに待機していたとき、センター内に貼られているポスターが「心のSOS」や「自殺防止月間」など、精神関係の、しかも一分野のものばかりだと気付いた。もしかすると他のセンターでは、それぞれ特色のあるポスターや資料があるのだろうが、相互交流や情報共有ができてないかもしれないと感じた。自分の知っている分野だけにとどまらず、ユニバーサルデザイン社会を考えるため、これから審議会を通して勉強させてもらおうと思う。

八田
委員

日頃は公益財団法人日本漢字能力検定協会に所属している。京都本部は、元弥栄中学校跡地に5年前に移転し、漢字ミュージアムも開館している。協会の活動は大きく3つ、日本語能力育成活動、普及啓発活動、調査研究活動である。この中で一番知ってもらっているのは漢検かと思う。そのほか、清水寺で発表している「今年の漢字」も協会が主催しているイベントである。

そういった幅広い活動をしている中で、今回改めて協会の活動とユニバーサルデザインの関係調べてみたところ、2007年に当時年間志願者数を前面に出していたポスターに、250万という数字を出していた。その数字が赤と青色で構成されていたが、印刷会社からユニバーサルデザインという考え方があるということを知った。日本には色弱の方が300万人くらいいるということ、赤と青の間に白縁を施すことで視認性が上がるということを知っていただいた。それが一番初めに協会がユニバーサルデザインと接した機会だった。最近では、10年前から文章検定を主催運営している。この検定問題にはユニバーサルデザインフォントを昨年度から採用している。漢検でも採用したいが、技術的な問題を乗り越える必要があり、まだ採用できていない。パンフレット類などではユニバーサルデザインの考えを取り入れている。

本條
委員

弁護士会は大きく三つの事業でユニバーサルデザインに関わりを持っているのではないかと考えている。一つは、こうした審議会に弁護士を派遣する事業をしている。このユニバーサルデザイン審議会以外に、京都市高齢者・障害者権利擁護ネットワーク連絡会議というものがあり、いろんな団体の方が出席され、相互に情報交換をしたり、こういう場合は法律的に問題がないかという諮問を受け回答するという活動を行っている。

二つ目は啓発活動で、人権、権利擁護に関する講演依頼を受け、その内容に応じて講師を派遣し講義を行うということをしている。私自身も京都市社会福祉協議会から依頼を受け、6年前から母子世帯のための法律知識ということで、母子世帯の方がどういった権利主張ができるのか、生活を支えるためにどういった制度が利用できるかについて講義を行っている。

三つ目は法律相談事業ということで、個別の方への法律相談を行っている。高齢者、障害のある方には無料の「よろず電話相談」を行っており、毎週火曜日午後1時から3時まで、1回20分であるがどなたでも気軽にご相談いただだけ、ご本人以外にも、関わっておられる福祉団体や行政の方からも相談いただくこともある。

弁護士会として自分たちの活動をアピールすることが上手くなく、こういった事業をご存じでない方も多いので、今後の広報も含めてやり方を検討しているところである。

本日保田委員から配布いただいた京家連の季刊誌に、相談の方法についても記事にさせていただいているので、御参考にしていただきたい。

阪根委員 既に引退しているが、現役時代は車椅子バスケットボールでアテネパラリンピックの日本代表として出場した経験がある。学校などで講演活動を行っており、自分の経験から、立てなくなっても、大きな人生の転機を迎えても、自分のやりたいことを見つけたら、何でもチャレンジでき、夢が叶うということ、車椅子バスケットボールの体験を通して伝えている。自分一人が発言したり行動を起こすだけでは何も変わらないかもしれないが、車椅子生活の目線から、普段のまちの中でのバリアフリーやまだまだ足りないこと、普段から抱えている疑問を発言したり皆さんのお力を借りたりして、変えていくことができたらいいと思っている。

井川部会長 昨年まで京都光華女子大学で教員をしていたが、今はデザイン事務所で地域創生やユニバーサルデザインの振興に取り組んでいる。学術的なことよりも1利用者としてユニバーサルデザインについて発言していこうと思う。

井川部会長 ここからは日常でユニバーサルデザインについて思っていることなどに発言していただきたい。

このまちで暮らす中での不便さは、その立場にならないと分からない。その立場になって初めてわかることもあるので、それを聞いてまちづくりにいかしていけないといけなと思う。日頃感じていることがあれば発言していただきたい。また、他の委員の守備範囲のことで聞きたいことがあれば発言していただければと思う。

阪根委員 前回の審議会の際に発言できなかったもので、今回は発言したい。
普段車を運転するが、最近、車いすの人はこういう手助けをしたらよいということも含めて多くの人に見てもらえたらうれしいと思い、できるだけ公共の乗り物を使うようにしている。

私は、手助けをしてもらうのが苦手。電車は一人で乗ることができ、大抵のことは何でも自分でできてしまう。ただバスはどうしてもスロープを付けてもらう必要があるので、運転手の手を借りなければならず、なかなか利用しようと思わなかったが、3年程前からなるべくバスにも乗るようにしている。バスに乗って気づいたことがあり、これは早急に改善してもらいたい、車いすを固定する場所は、二つ座席を起してもらった方がいい、そこが優先座席になっているバスがあった。優先座席に座っている人に場所を譲ってもらわないといけなのが申し訳ない。ぜひこれを何とかしてもらいたい。バスの座席数も少なくなってきたが、車いすを固定する位置を優先座席ではないエリアにしてもらいたい。

立っていることが困難なお年寄りがいても譲ってもらわざるを得ず、安全面も含めてどうにかしたいと思ったので、ここで発言させていただいた。

1年後2年後にそれが変わるということでは意味がなく、今すぐにでも変えてもらいたいと思っている。

井川部会長 ここで出た意見を、どのように担当部署につなげていくかについては、保健福祉局と相談したいと思う。

ユニバーサルデザイン賞でも優先席のアイデアが出ていたが、考えていかなければならないことだと思う。

神岡委員 毎日同じ時間に乗ってくる車いすの方を把握していて、事前に「スペースを空けておいてください」とアナウンスする運転手の方もおられる。バス停

に着いたら、さっと降りて一人でスロープを出したりされているので大変だなと見ている。他の乗客もどれくらい手伝えればよいのかわからないということもあるだろうが、周りにいる方が手伝ってあげたらよいのにとすることがある。周囲の人がどれだけ協力できるかということもユニバーサルデザインの考え方である。目立つから手伝わないということもあると思う。みんなで助け合う仕組みがあればよいと思う。

井川 部会長 今ではコロナ禍で観光客も少ないが、以前のように観光客が戻るとより難しくなる。今のうちにそういったことも考えておく方がよいと思う。

八田委員に質問だが、情報のユニバーサルデザインということがあるが、どういう文章や言葉遣いがお年寄りにはわかりにくいのか、長い文章はわかりにくいとか、ユニバーサルデザインの観点で考える文章があると思う。文章検定でもそういった視点を考慮していただければよいと思うがいかがか。

八田 委員 ユニバーサルデザインの原則や京都市が発行している「わかりやすい印刷物の作り方」の考え方は、我々の文章作成の考え方と共通している。

文章検定で求めている、一文一意やわかりやすさ、構成による理解の得られやすさなどの考え方は、ユニバーサルデザインと言えらるものだと思う。

井川 部会長 さらにユニバーサルデザインと関連付けて実施してもらえるとありがたい。

八田 委員 検討する。もう一つ、わかりやすさという点で話をすると、80歳代の両親が最近スマホを使い始めたが、新しい単語にばかり出会うと嘆いている。「クラウド」「スクロール」「ダブルクリック」って何？という、我々が日常的に違和感なく使っている言葉が、全部新しい言葉で理解しにくい。それを説明するのにずいぶん頭を使い、「クラウド」や、Google と Yahoo! などの違いを説明するのに苦労した。問われて初めて気づくことが身近に多いという印象を受けている。

こういう苦労があることを知らないことが一番いけない。ユニバーサルデザインについても知る機会が必要。先ほどのバスの話も、優先座席については皆が知っているが、車いすの対応はまだ十分に認知されておらず、理解が及んでいないと感じた。

井川 部会長 新しいテクノロジーで我々は便利になってきているが、すべての人がそれを使いこなせるわけではないということは必ず押さえておかないといけない。

上田 委員 長年、知的障害のある本人たちの活動である青年学級に携わっている。青年学級は、京大の近くの建物で活動しており、普段は月2回の学習会、クラブ、他の青少年活動センターの活動を行っている。

行政の文書は私たちにも理解が難しいが、知的障害のある本人たちにとってはなおさら難しい。数年前に京都市役所の方が、行政文書を簡単な文書に直したものを持ってこられ、知的障害のある人はこういう文章が理解できるかという質問を受けた。今年、九州にある大学からアンケートのお願いがあった。知的障害がある人の文章理解のため、ひらがなにすれば理解できるかというもので、何例かの文章が送られてきた。娘は軽度の知的障害で、漢字が読め、文章も書ける。送られてきたひらがなの文章の中に、「○○は」の

「は」が「わ」となっているものがあり、娘は「ここの「は」が「わ」になっていてとてもわかりにくい」と回答していた。知的障害は、ひとりひとり状態や程度が違うのでマニュアルを作るのは難しいと感じている。

井川 部会長 ユニバーサルデザインといっても、様々なケースがあるので統一することは難しい。

育成会は作業所も持っておられると思うが、ある住宅地の先に作業所があるそうだ。住宅地のところにバス停があり、作業所に行くためには住宅地を通らないといけない。住宅地の住民は最初作業所を作ることに反対したそうだ。作業所の方は、何とかしないとイケないということで、交流の場を何年もかけ何度も実施された。そうすると住民の理解が得られ反対がなくなった。知らないままだと偏見だけで考えてしまう。交流して知ることが大事だと思う。

上田 委員 キャラバン隊でも伝えているが、例えば、ひとりごとをぶつぶつずっと言っているとか、声を出すとか、知らない人から見たら、何？と思われると思う。自身も子どもが小さいときに、電車に乗っていると、「お前殺したろか」とぶつぶつ言っている男性がいて、少し距離を取ったことがある。周りの人は慣れていて、その男性は言っているだけで実際には何もしないということを知っておられ、平然としておられた。その様子で、この人はこういう人なんだということが分かった。娘が通っている作業所では、周辺を掃除したり、花を置かせてもらったりという活動をしている。そういう活動をしていると周りの方は見てくれていて、褒めてくれたり、理解をしてくださる。

井川 部会長 最後は心のユニバーサルデザイン。誰でもやさしい心を持っていると思うのでそういう交流などの機会が大事だと思う

木戸 委員 子どものことについても同じで、子どもが賑やかなのを良しとしてくれる人とうるさいと感じる人と様々である。児童館として、見える、見せる児童館を意識している。周りの人に理解してもらうことが大切で、子どもでも、子どもだからできることを積極的に発信することが大事だと思う。

子どもは自然に出会っていると、普通のこととして受け止める力が優れている。障害のある子どもを受け入れる際、大人は、周りの子どもがその子に何か傷つく言葉を投げかけないかなど心配するが、それは取り越し苦労で、自分が悪かったと思うこともある。身近にあることは理解につながる。小さい頃から知る機会、共に過ごす機会があると、それを普通のこととして受け止められる。出会いの場所がたくさんあると子どもも豊かになる。その子どもたちが大人になっていくので、そういった機会が広がっていくとよいと思う。

保田 委員 事業所ができるときの反対運動は、精神障害の関係では当たり前にある。精神科病院が高齢者施設を始めたいと言った際に心配の声が上がったり、作業所をつくらうとしたら反対運動が起こったり。交流の以前に「怖い」というイメージがあり、対話の場が作れないこともある。

精神科に初めて来られた方にはインテークをするが、その方自身にも精神科に対する差別感があり、とうとう精神科にきてしまったと、自分自身を差別したり、自分を否定される。そういうところから「たくさんある病気のなかの一つ」という意識に変えていくことも大変だった。

30年間精神科医療に関わってきたが、まだまだこれからで、だからこそ

様々な団体と連携していかなければならない。

病院を開放して夏祭りをしたり，病棟にも入ってもらったりして交流の場を作り，その地域の人には理解してもらえても，それ以外の人に理解してもらうのは難しい。バスの中で，「ぶっ殺すぞ」を言っている人を見ると怖いのは当たり前。その人に対して「そんなことを言ったら周りの人が怖がる」ということを伝えながら，周囲の人にその人がなぜそういう発言をするのかということを知ってもらえればと思ってやってきたが，なかなか難しかった。自分たちがこうだと思ってやってきたことがあるが，精神医療や精神保健福祉ではない他の分野の視点から，もっとこういうふうなやり方があるのではというような話を聞けるとうれしい。

井川 部会長 ユニバーサルデザインと関係のないデザインの世界でやってきたが，ユニバーサルデザインに関わるようになってよかったことは，例えば車いすを利用している方と接点ができただこと。ガイドマップを作り，遠方からでもマップを知ってうれしく思ってくれた人がおられ，励ましのメールなどもいただいた。明石の方から話を聞きたいと連絡があり，会う約束をした。その日に限って集中豪雨ですごい雨が降っていて，どうやって来られるのか心配していた。すると，合羽を着て普通に時間どおりに来られた。知らないから心配しすぎるが，本人は全然平気。そういう方にすごく励まされる。弱音をはかないし，文句も言わないそういう強さを持っておられる。そう考えると，我々はもっとやらなければならないことがあると常々思っている。

阪根 委員 いろいろ思っていることはあるが発言する場がなかった。やっと発信する場ができたのがうれしい。東京オリパラが過去のことにならず，この機運を引き継いでいけたら，もっと住みやすくなると思う。

井川 部会長 こういった短い時間でも意見をいただくことは有意義だと思う。これまで審議会として集まって審査をしてきたが，皆さんからの意見を吸い上げる仕組みがなかった。審議会委員の皆さんに，それぞれにユニバーサルデザインに関して思っていることや，改善した方がよいと思うことについてレポートをお願いすることを提案したい。それを皆さんにお配りし，いかしていきたい。詳細は保健福祉局と調整して，改めてお知らせしたいと考えているがよろしいか。（⇒全委員了承。）

2 ユニバーサルデザイン賞審査

審査の結果，以下のとおり受賞作品を決定。

大賞（各部門1作品）

【アイデア部門】 藤田 晴南（九条弘道小学校6年）体温充電補聴器「充電でき Tel」

【エピソード部門】 寺田 かのこ（京都すばる高等学校2年）「人の為に」

優秀賞（アイデア部門11作品，エピソード部門2作品）

【アイデア部門】

氏名（学校名・学年）	作品名
小西 晴（幼稚園年長）	こえ（声）エレベーター
平松 礼香（小栗栖宮山小学校6年）	Convenient（便利）トイレ
木村 光（向島南児童館 小学校6年）	ポイ捨て回収ロボット
松宮 弦希（高野中学校1年）	らくらくポスト

尾崎 ひなた (高野中学校 1年)	Do you know it?
櫻井 美すず (西京高等学校附属中学校 1年)	車椅子事前お知らせ機械
宇野 樹 (西京高等学校附属中学校 1年)	もっと多か国語表示
森 心音 (西賀茂中学校 3年)	役立つくん
橋本 大毅 (西賀茂中学校 3年)	チケットレス改札口
當森 咲月 (京都すばる高等学校 2年)	熱くならない器
中神 優菜 (京都すばる高等学校 2年)	Announce Bangle

【エピソード部門】

氏名 (学校名・学年)	作品名
今村 虎大 (京都すばる高等学校 2年)	気持ちで十分
橘木 暖人 (京都すばる高等学校 2年)	おばあちゃんとの電話